

脇役

子母澤 寛

文春文庫



文春文庫

脇 役

定価はカバーに
表示してあります

1989年3月10日 第1刷

著 者 子母澤 寛

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-746403-9

〔庫〕

脇 役
子 母 澤 寛



文藝春秋

目次

脇役

7

厚田日記

39

名月記

83

丁斎塾始末

109

南へ向いた丘

147

玉瘤

183

解説 磯貝勝太郎

247

脇 役

脇 役

只今は荒川区南千住町せんじゆと申しますけれども、昔はただ三ノ輪みとだけで通用しましたあすこの百観音円通寺。本堂の左に上野彰義隊しやうぎを葬つてある。その中に交つて自然石に「合同船」と刻んだ碑がございます。それに名をつらねた山田八郎、西村賢八郎、松本義芳、前野利正、大塚嘉久治、羽山寛一、小林一知、百井求之助。この八人はみな彰義隊一方の旗頭であります。あの時は実に烈はげしく戦つた。刀疵鉄砲疵かたなきずの無い者は一人もいなかったのでもうございませう。しかし世の中が變るともうその時の勢にうまくのつて荒波を漕こぎ渡つて行くなどという芸当はとても出来ない。だんだん年もとつて来る、どうせおれ達は敗け犬だ。この果敢はかない敗け同士が船に乗り合わせて雨風に打たれながらも、しっかりと手をとつて助け合つて行きましようという、互いの心の誓を、石にしるしたのが、これです。

この中で、大塚嘉久治。元の名を霍之丞かくのじやう。今日はこの人のおはなしをさせていただきますしやう。

彰義隊が総崩れになって、頭並かしらなみ天野八郎が白呉しろご紹服地に雲竜うんりゅうを描いた陣羽織さえはつきり見えない程の泥まみれで、道灌山どうかんやまから音羽の護国寺へたどりついたのは、もう夏の日の黄昏たそがれであつた。雨はやんで、か弱い音の虫が鳴いていたという。

門前でばったり五人づれで来た大塚霍之丞に出逢であつた。姿恰好かっこうで八郎はすぐわかったが、顔は一面の泥だ。

「大塚さん」

天野が駆け寄って、べとべとの手で相手を抱くようにした。

「おお、天野さん、御無事でしたか」

「はっはっ。まだ死なん、まだ死なん」

「お互いに」

二人はからだをゆすって笑つた。笑つたが泣いていた。大塚は頭取並でもあり第二白隊の隊長だ。

すぐ日が暮れたが、どんよりした雨空の底に月が出ている。

その月の明るさで、天野と大塚は、境内を流れる小川を見つけて、そこではじめて手足や顔を洗つた。護国寺の事はかねて打合せがあつたので、三人五人、或いは二十人も一とかたまり

になつて落ちて来る。

寺から塩の握飯が出た。沢庵たくあんに酒が出た。燭しよくをかかげて、疵手当をさせながら、数えたら、二百名の余に及んだ。

酒が廻ると定きまつたように景氣のいい再挙説が出たが、結局は一先ず解散の説に定つて、やがて思い思いに寺を出ていった。組頭丸毛まるも勒負ゆきえに従つた七十余名は、握飯や草鞋わらじの仕度も充分にして甲州へ向つたが、暁近く青山久保町の梅窓院までたどりついて小休憩をした時に、丸毛がふと氣がついたら、いつの間にかもう四十人が消えて終しまつて、残るもの既に三十にも満たない。丸毛は地団駄じだんだふんで号泣ごうきゆうした。が、もうどうにもならない。殊には赤坂御門には官兵が充分に鉄砲を揃そろえ、しかも数百に余つて迎撃の備えをしているとわかつたので、遂ついに止やむなく、一人一人、然しかるべきところに姿を隠すということになった。

この丸毛の相談役として同じに甲州へ向おうとした中に、大塚霍之丞も居りました。とにかくこれは慶応四年（一八六八）五月十五日の事でございしますから、それから凡およそ二箇月。即ち七月十三日に、霍之丞は、本所石原町鉄砲屋の炭屋文次郎の奥の座敷で、天野八郎と、ただ二人、早目の昼の膳について居りました。

すぐ地続きが東江寺で、ここに多田の薬師堂というのがございます。特に大きな建物でもなく、どうこうという程もございませんが、恵心僧都えしんそうずの作で多田満仲の持仏であつたという

薬師如来の像が安置してあって、今もなかなか信心者の多いところでございます。

庭の四つ目垣には朝顔の蔓がからんでいる。風鈴が軒に下って、これがちりんちりん鳴っている。もう夏の暑い最中で市中ではなかなか凌ぎ難いのでございますが、薬師につづいて、樹や草の多い大名の広い下屋敷があり、すぐ鼻先が隅田川ですから、時々思いがけない涼しい風が流れ込んで来たり致して、酒の好きな天野は、単衣のふところを開いて、団扇をつかい乍ら、盃を霍之丞にさして飲んでゐる。さかなは冷豆腐だったと申し伝えます。

二

天野はあれから直ぐここへ隠れた。同志へはそれぞれ巧みに連絡はとったが、いつ自分が敵の襲撃を受けるかも知れない。

そうになると、僅かな恩を深く着て自分をかくまってくれている文次郎が、どのように迷惑するであろう。そんな場合でも、誰にも迷惑のかからぬような、然るべき隠家へ移りたいと心掛けて、それとなく探していたら、いい塩梅に、四谷鮫ヶ橋に手頃な一戸が見つかった。

今、食事を済ませたら、霍之丞共々、隅田川端から舟で出ようとすっかりその仕度をしていた。

「残念だが、世の中は一刻一刻目に見えて変って来るね、大塚さん」

「これも八万騎などと誇号する徳川家旗本が腰抜けだからですよ、まことにお恥かしい」

「いやあ、もう誰がいい、誰が悪いというようなものではないだろう、時の流れ、天の勢、どうすることもならない。わたしは、やっとそんな気がして来た」

「そんな事はない」

「そうだろうか。わたしは、上州の田舎へでも引込んで百姓でもやろうかなんぞと考えているよ」

「はっはっ。方一里に足らぬ小天地で、新式の銃器を腐る程持つて八方に迫った官兵を相手に、詰るところ迄はやった彰義隊の頭目が、腹にもないそんな自棄糞をいっちゃあ困りますな」

「はっはっ。そうだろうか。それは然様として、あんたは、唄や三味線が大層上手ときいたが、わたしもこの田舎氣質が少しでも抜けるように、あんたに手ほどきして貰いたいね」

本気とも冗談ともつかず、天野がずんぐりした太い猪首を叩いて、そんな事をいった時であった。蜂須賀二十五万石の筆頭家老稻田九郎兵衛の家来六十余名が、銃を構えて窃かに文次郎の家を取り囲んでおいて、撰りすぐった六名がときの声をあげ屋内へ雪崩れ込んで来た。稻田は一万石を領したので、別に稲田藩ともよんで、当時、市中取締に任じていた。

天野はかねて敏捷猿のようだ。あっと思う間に、裏二階へのがれた。うしろから捕手は鉄砲を乱射した。焰硝が目を開けない程屋内へ立ちこめた。

天野は二階から更に屋根へ出た。裏つづきに物置がある。それへ逃げて、ここから隣り屋敷へ飛び降りれば、森もあり、池もあり、何んとかなる。かねてから考えていたところだ。

が、天野がちらつと屋根へ姿を見せると同時に、下の伏兵が一斉に撃ち放した。

一発が額をかすった。天野は目がくらんだ。

残念ながらそのまま肥ふとったからだが大きな毬まりのように屋根から転がり落ちるのへ、稲田兵が折り重なって飛びついた。

武士の情も何もなく、まことにひどい話ですが、人事不省の天野を、荒縄でがんじがらめにして、このまま牢ろうや舎へ送りまして、天野はこれから牢で五箇月をすごしましたが、病氣にかかり十一月五日——北にのみ稲妻ありて月暗し——と辞世を残して歿ししました。三十八歳でございます。

この騒ぎの中に、一緒にいた霍之丞はどうしたかと申しますと、何しろ江戸っ子で、それに天野に勝る程すばしっこい人ですから、あの時に裏二階までは天野と一緒にでしたが、捕手が天野に氣をとられている隙すきを見て、早いところ、ぱっと横手へ飛び降りて、そのまま生垣を潜くぐって、薬師の境内へ入ると、目ばたきの隙もなく薬師堂の縁の下へ隠れて終ったものです。何しろ大勢の官兵の目の前で、これだけの事をやるのですから大したものでございます。官兵もこれを見たからそれっというので堂の下へ、どんどん鉄砲を打ち込みました。ところがどういふ事をやっていたものか、霍之丞は出て来ないし、ちっとも手答えがないのでございませう。入るのを確かに見たのですから、ここにいるに相違ない。この上は仕方がない、

お堂を焼き払うということになってその準備をはじめると、何しろ由緒のある薬師でござんしょう。お住職じゆうしやくだの、土地とちの信心の者などが、そろそろ出て来て土下座をして、どうぞそれだけは御容赦下さいますようにといって手を合わせて拝むのです。

官兵にも心きいた人はある。こういう事をして、江戸の人間に、自分達をひどい奴やつだ、情も何もない忌いやな奴だと思わせたりしては、後々これを治めて行くのに何かと不都合であろうと言ひ出す人があつて、それも尤もつとだ、とにかく焼払いだけは止よそうと話が定り、その代り、兵士を五六名張番させて、ちよいと頭でも出したら射つて終えということ、とにかく一旦は引きあげました。霍之丞は、それから丸二昼夜というもの、食わず飲まず、息を殺して隠れつづけたのでございます。後の話ですが、霍之丞は、食べないのはまだいいが、水がほしくて軀からだ中ぢゆうが燃え出すようになったといつていたそうでございます。番兵は根くらべに敗けたようなもので、あんなに鉄砲を打ち込み、二日もしてまだ出て来ないというのは、あのどさくさに紛れて、何処どこかへ逃げて終つたのだらうということで、番兵は遂に引き揚げて終いました。それでも霍之丞は、また半日じつとしていて、やつとのことで縁の下から這はい出した。もうふらふらで、そちこち痛くて立つこともできなかつたそうでございます。

その姿を見ると、すぐお住職が飛んで来て、実にどうも心配を致しました、よく御無事でいられました、それにしてもお腹なかのすいたことでありましようといつて、寺の書院へつれて行つて、味噌汁をたいて御飯を御馳走してくれました。何しろ彰義隊は、吉原で情夫いろに持つ

なら彰義隊という唄が流行^{はや}っていた程で、江戸っ子には大層好かれております。

腹^{はら}拵^{しら}えが済んだから、霍之丞はよく礼をいって、これから白地の単衣一枚で丸腰で気の利いた船頭をたのんで舟で隅田川を上って今戸へ渡りました。ここに角中^{かどなか}というしゃれた船宿がある。ここのおかみさんというのが前々から霍之丞とは極^{ごく}く懇意^{こんい}な仲でございます。多田薬師の騒ぎはとくに知っている。こういう時には、その人が自分の知っている人ではないだろうかと思うのが人情で、おかみさんも、内心、心配しているところへひょっこり顔を見せたから、

「まあ霍^{かく}さん」

という訳で、次の言葉もつづかない。

「何しろ危ねえんだ。おかみ、先ずこの頭を野郎^{やろう}にして呉^くれろ」

鬢^{びん}が狭く月代^{さかやき}がずうーっと横へ広がって脳天が丸く出ていて、侍とは違って極く下司^{げす}な恰好でございます。こうすると一寸^{ちよつと}武士には見えないのでございます。

霍之丞はそれ迄^{まで}は流行の総髪にしておりました。

三

屋敷が小石川の新町にある。

日の暮れるのを待って、角中^{かどなか}のおかみさんと二人、いい仲でもあるように、わざと人目に